

令和 6 年度 湖西市総合教育会議議事録

1 日 時 令和 7 年 2 月 26 日(水) 午後 3 時 00 分～午後 4 時 10 分

2 場 所 湖西市役所 3 階 委員会室

3 出 席 者

(1) 構成員

市 長 田内 浩之

教育委員会

教 育 長 松山 淳

委 員 西川 倫予 山下 恵子 穴水 正哲 杉山 健

(2) 意見聴取のための関係者として出席した者

教 育 次 長(鈴木 啓 二) 企 画 部 長(山 本 敏 博)

企 画 政 策 課 長(馬 渕 豪) 教 育 総 務 課 長(戸 田 昌 宏)

学 校 教 育 課 長(黒 柳 孝 江) 学 校 教 育 課 課 長 代 理(大 石 誠)

教 育 総 務 課 課 長 代 理(仲 本 真 武) 教 育 総 務 課 主 任 主 査(加 藤 裕 美)

(3) 会議の事務のために出席した者

教 育 次 長 (鈴木 啓 二) ※再掲

教 育 総 務 課 長 (戸 田 昌 宏) ※再掲

教 育 総 務 課 課 長 代 理 (仲 本 真 武) ※再掲

4 協議又は調整に係る事項

教育 D X における学習環境の現状と今後について
市内学校における自然体験活動について

5 協議又は調整に係る事項に関する出席者の発言

別紙のとおり

午後 3 時00分開会

(企画政策課長) ただいまから、令和 6 年度湖西市総合教育会議を開会する。初めに、市長から挨拶をいただきたい。

(田内市長 挨拶)

(企画政策課長) 続きまして、協議事項の教育DXにおける学習環境の現状と今後について、教育長より説明をいただいた後、市長に発言をいただき、その後教育委員の皆様には順番に発言をいただき、市長からは1人の委員が発言した後に意見を述べていただくという流れで進める。それでは教育長からの説明をいただきたい。

(教育長) それでは教育DXの取組について説明をさせていただく。これまでの取組については、令和2年度から令和3年度にかけて、無線LANと端末等の基盤整備、教育用アプリを整え、現在のタブレット、アプリを使い始めて4年目になる。まずは積極的に使うという段階から、現在は効果的に使う段階へすすんでいる。多くの授業でタブレットを活用しており、その使い方も多様な工夫がみられる。また、令和4年度のグループウェアや令和5年度の学校保護者間連絡アプリ等も導入し、校務DXも導入している。

教育用アプリとして利用している4つのアプリのなかで、Google WorkspaceやSKYMENUクラウドは、授業の中で多く活用されている。様々な使い方ができるが、一例として挙げると友達が何を考えているのかが一瞬にして分かるという場面を目にすることがある。eライブラリは、AI型のドリルであり、子供の習熟度に応じて自動構成された問題を解くことができるというもので、授業の場面や隙間時間や家庭学習などで活用している事例がある。令和7年度は、一人1台端末の更新作業を行う計画であるが、あわせて学習用アプリケーションの選定を行うことになる。

教育用アプリについて、教員へのアンケート調査の結果をまとめているが、それぞれのアプリの使用状況、使い方、今後も継続したいか聞いた調査結果である。どの学校においても随分と活用が進み、私も学校訪問の折には実際に利用している様子を見る機会があり、子供たちもそうだが先生方もすっかり使いこなしているな、こんな使い方もあるのか、と感心している。

課題をまとめたが、令和7年度は端末更新に合わせてアプリの検討時期になるため、しっかり検討するタイミングだと考えている。ドリルには個別最適な学習が可能になる機能、授業支援では、協働的な学習を補完する機能、自動採点など教員の働き方改革につながるもの等が、検討の視点になると考えている。

(企画政策課長) それでは議論に入るため、市長の発言をお願いします。

(市長) 大前提として今から自分の考えを発言するが、これはあくまでも議論のたた

き台程度に理解いただければありがたい。私が以前宇都宮市の教育委員会に視察に行ったことが一番のきっかけである。簡単に言うとアダプティブラーニングといって、いわゆる個別最適化のA I型の学習機材というものだが、先ほどの教育長の話のとおり現在ドリルを使っているが、その進化バージョンというか、例えば数学で同じ分数を計算しても子供たちがいろいろいて、間違い方もそれぞれだと思うが、最新だと思ったのは間違い方で次の課題が変わってきて、なおかつ解説もついてくるため、しっかりその課題を克服できるような問題が出て、また違うところで間違えるとみたいに繰り返し、しっかりA Iが判断しその子その子に適切な問題とか、指導が入ってくるというようなものをまず私の中ではイメージしており、今でも教育委員会では既に取り入れているが、より高性能でより子供たちのためになるようなものを、検討した方がいいのではないかというのが1個の課題提起になる。ただし、今はデジタル教科書が課題になっているが、教科書に関しては、全てデジタル化すればいいのかというと、私の個人的な意見では非である。私も仕事柄、頭に何かを叩き込んで議論したりとか、人前で喋ったりすることがあるが、その理由は定かではないが、何度かチャレンジをしてみたがなぜかパソコン上の画面とかタブレットだと、私の場合だと頭に入らない。片や紙ベースだと、ぐっと物事を考えたりとかするとき、やはり私は紙ベースの方が適してるかなと思うので、そこも含めてぜひ皆様のご意見をいただければありがたいと思うので、よろしくお願いしたい。

(企画政策課長) それではここから教育委員の発言をいただきたい。まず始めに西川委員に発言をお願いする。

(西川委員) 先ほど教育長から説明いただいたが、生徒用の1人1台端末はしっかりと準備できているかと思うが、同時に教員用のパソコンも使用しやすいものをきちんと準備していただきたいということと、あとそれを使うにあたって、きちんとセキュリティ対策を万全にして、個人情報の流出等がないように、対策をきちんとしていただきたいと思うのがまず1点。もう1点はこの資料からの現在のアプリの使用率と、今後使用していきたいという先生方のアンケート結果に、少々ギャップがあるのではないかというふうに感じ取れる部分があるが、そちらの方のギャップを埋めて、きちんと活用に進めていただきたいという所で、またアダプティブラーニングを進めていく上でも、教員や学校ごとに差がないように使用や活用の支援もきちんと進めていっていただきながら、教員の先生方がきちんと活用に対してのモチベーションが上がるような、支援や研修なのかそういったものも含めて検討を深めていっていただけたらと思う。

(市長) ギャップという言葉が出てきたが、ギャップというのは使える先生方と、苦手な先生方とのギャップという認識でよろしいか。

(西川委員) 私が思ったギャップというのが、まずこのアンケート結果の使用をしているというパーセントと、今後使用していきたいという部分のパーセントに差があるのではないかというギャップ。今現在はあんまり使用していないと答えた先生方に

もいろんな理由があるかとは思いますが、そのギャップである。

(市長) 個人情報の流出対策について、現場はどのように対応しているのか。

(教育長) 個人情報については、一般のソフトウェアを使うことが減っており、例えば成績処理であるとかそういったものは、それに対応した専門のソフトウェアを使っており校内でしか使えないようになっているため、外に流出することは考えにくいと思われる。

(市長) 現場もそこは気をつけながらやっていると思う。もう一点の意見でこういったD X化についていける先生と、なかなか苦手だという先生がおり、私も県議時代にいろんな現場を視察させていただいたが、ここが最大の課題だと思っている。だからといってアナログの先生の教え方が悪いのかということでもない面もあることから、そこで何事もそうですがバランスが大事だと思う。ただ全く使っていない先生には若干使っていただくような流れを作った方がいいという感覚はある。

(西川委員) そこは個人の使用頻度であったり不得意ももちろんあると思うんですけども、今までまったく使用をしていなかった先生にもぜひ使用していただくためにも、例えば、I C T支援員っていうものを学校の方に来ていただいていたと思いますが、そういったものも引き続き力を入れて先生方のサポートをしていただく、D Xを進めていくために、そういったものも一緒に進んで、さらに強化していただけたらなっていると思います。

(市長) そういった対策もしていきたい。

(企画政策課長) 続いて山下委員に発言をお願いします。

(山下委員) さきほど西川委員からもありましたとおり、教職員の習熟度についてのアンケートの結果から思った私の意見だが、ちょっと2点。今現在苦手な先生が結構多いなっていう感じが、このアンケートの結果から分かった。在籍している学校からI C Tが得意な先生が他の学校に出張して授業をすることができないかっていうのを思った。

それと、学習環境の教育D X化については慎重にやっぱり動くべきじゃないかなっていうのは私の意見である。私もどちらかというとアナログな人間で、デジタルがとても不得手なであるから、紙でないとわかりづらい、頭に入りづらいっていうところはある。ペンでタッチするだけではなくて、やっぱり書いたりとかっていうのではないと、私はそちらの方じゃないと頭の中に入っていない。大人もそうだけれど、児童生徒の中には対面で丁寧に文章を書いたりとか、工作をしたりなどの教科や単位によって、工夫した授業をする必要があるものについては、そういった授業でやっていくべきじゃないかな、全部が全部教育D Xではなくて、対面でいろいろゆっくり丁寧にやっていく必要もあるのかなって思った。

(市長) 2点目の意見からだが、私がさっき申し上げた内容とかぶっている部分もあると思っている。やはりD Xを取り入れるのに向き不向きなところがあると思っており、このアンケートもリアルに示しており、私は特に算数数学なんかはとても適して

いると思っていたら、やはりこのアンケートを見ると先生方も同じように思っているということで、向き不向きがあることから全部D X化すればいいとは私も全く思っていないくて、むしろ例えば人の顔見て、討論するような授業も最近が増えてきたし、それこそ湖西はもの作りのまちだが、何か物を作ったりとかっていうのも、それこそ画面上でC A Dで動かすことも大事だが、ただそれと同じぐらい、例えば自動車を作る時の塗装の工程をテレビでやっていたが、限られた職人さんでないとやれない工程で、マイスターみたいな形でしっかり認定をされていてっていう技術の伝承みたいなところがとても大事と思うので、山下委員がおっしゃる通りやはり一気に推進ということではなくて、慎重に行くところは慎重にやっていかなければいけないってのは、それは私も全く同意見である。あと I C Tが得意な先生が他の学校に授業に行くという意見だが、山下委員のイメージでは I C Tに関する事業を総合の授業等でやるというよりは、数学とか算数の授業で I C Tが得意な先生がやってみるのか、どちらのイメージが近いのか。

(山下委員) I C Tの授業の実践、生徒さんに向けた実践、教科というか、その先生によっていろいろだと思うが、例えば授業のコマ数もあると思う。その中で例えば鷺津中学校で得意な先生が、湖西中学校に行って授業を実施。総合ではなくても単元でもいいと思う。

(市長) 例えばD Xが得意な国語の先生が、他の中学校に行って同じく国語の授業をD Xを取り入れてやるみたいなイメージでよいか。

(教育長) 校内には得意な先生もあり、校内で授業を見せ合ったり時には隣の学級の授業代わりにお手本としてやってあげるといような取り組みはこれまでもしている。学校を越えて授業をやるっていうのはちょっとハードル高いと感じており、今後工夫はできるかもしれないが、今のところそういう取り組みはあまりない。

(市長) 本日いただいた提案は私の方でもしっかり勉強したいと思う。

(企画政策課長) 続いて穴水委員に発言をお願いします。

(穴水委員) 私から4点ほど喋らせてもらう。まず最初にG o o g l e クラスルーム、G o o g l e のサービスの中にクラスルームというのがあってそれは先生と生徒の間で、使ってらっしゃると思う。その一つの中に保護者招待機能っていうのがあり、私も教育機関向けのアカウントじゃないと中も見れないので、見たことないが、学習の進捗状況とかそういうものを先生から保護者に向けて示すことができるような機能らしい。今のところまだどの学校も使っていないっていうことだが、湖西市でもそういうのが導入があればいいなっていうこれはちょっとした希望である。

次の点としてD X化について、市長は教科書は紙の方が良いっていう、私も学校で使う分には紙の方がいいかなと思うが、ただ持ち運びがなかなか大変なものだから、家庭用学習に使うときにはデジタル版を導入してもらって、家庭ではそちらを使って紙は学校で使っていくというような使い分けをしてもらえると、中学生になると自転車通学の生徒も出てきてだいぶ楽になると思う。小学生のカバンがね、なんとも言え

ない重量で、子供たちのものを何回か持ったりしたが、これを毎日背負って歩くのかってというような重みでいつもランドを背負っているのも、少しでも軽くできるような方へ、これが教育DXの目的とするところなのか分からないが、そういうところにも気を配っていただくような方策を練っていただけたらありがたい。

次の点として教職員の皆さんのお話になるが、まだまだお仕事にアナログな部分が、多分アナログじゃないとできない部分が結構残っていると思う。それを徹底的にデジタルに、不便になっても移行してみる。これはアナログの方がいいんじゃないかって思っても、とりあえず全部デジタルに移行してみた結果、やっぱりこれはアナログがいいよね、デジタルがいいよねってのがはっきりすると思う。その知見をもとに子供たちの教育に何をデジタル化するか、何をアナログでやるか、そういうような考えで取り組みをしてほしいなと思ってる。こちらは教育委員会が旗振ってできることかというところでもなくて、やっぱり市とも手を取っていろんな部分をデジタルに向けて合わせていかなきゃいけないところがあると思うので、ぜひ市長の立場からご支援をいただけたらと思う。

最後にリスキリング、いわゆる大人が勉強をするということが取り上げられて話題になっているが、どんな勉強するというと、手元にあるスマホを活用するのがやっぱり大前提になる。個人的な経験でも手元にいつでもあると、やっぱり学習が進む。短い時間でも取り組めるし、本当に個人的な経験で申し訳ないが、忘却曲線っていうのがあるということで、学んだことを忘れてしまう少し前にもう1回学習すると記憶が定着する。しばらくするとまたそれを忘れるのもう1回そこで勉強すると、より記憶に長く残るようになるっていうのがある。それが自分の学習に非常に役立ったので、そういうのも採り入れた教育のアプリをどこかから探し出してきて、湖西市の子供たちに使わせてあげたいなっていう気持ちがある。以上4点申し上げました。

(市長) まず1点目のGoogleクラスルームについて、それこそアプリが進化をすれば子供たちがどういうふうに関連して、どこまで教育の進捗具合が進んでいるのか、どこかの教育委員会ではGoogleクラスルームのソフトは使っていないが他のアプリでそこまで踏み込んでいるところがあり、子供たちの教育の進捗具合がリアルタイムで保護者に伝わるっていうのが、他の教育委員会ではあるが、そこまでは湖西市としては行っていないため、そこは1個の検討課題だと思う。

2番目のデジタルと紙の併用というところだが、先ほど西川委員と山下委員からも議論があったように、お互い良いところがあると思うので、最終的には併用というところに落ち着くのではないかなと思っている。

3番目の職員の仕事をもっとデジタル化できないかという点では、私も元々民間企業にいたので、何をしたらどれだけ業務効率化ができるかっていうことに取り組んでいたが、デジタルが先に来るのではなくて、アナログな状態でどこまで仕事を効率化できるかっていうところをまず検討し、その業務をアナログにしたら楽になるのかどうかっていうところが肝であると思っており、私も県議会議員のときに学校現場を拝見

させていただき、鷺津小学校のPTA会長のときにも痛感したのが、先生方が忙しすぎてゆっくり業務を改善する余裕がない、何か改善するときって少し余裕がある時ではないと人間やれないなと思うので、先生方の負担を減らして率先的に業務改善できるような環境に持っていくというところも大事なかなと思っている。ただ先ほど穴水委員の発言のとおり教育委員会とまた別の視点から見て、何かお手伝いできないかっていうところは、また私も研究していきたいなと思っている。

4番目のアプリの活用については、今、アプリやチャットGPTなどは進化が止まらない、先日、チャットGPTの上級バージョンに片言の英語で話してみたが、ネイティブの方が目の前にいるかのような感じで喋りかけてくる。これは話してるだけですごい英語の勉強になる、そこまで進んできているので、アプリとかチャットGPT含めAIというものを、教育委員会も市長部局もアンテナを高くして、最新のものを取り入れるかどうかは別として、きちんと研究することが大事であると思っている。また忘却曲線についても私の実感でも、忘れた頃にもう1回入れると、頭に残るといえるのはおっしゃる通りかなと思うので、そこはしっかり研究をしていきたいと思う。

(企画政策課長) 続いて杉山委員に発言をお願いします。

(杉山委員) 私の方からは3点ほど意見の方をさせていただきたい。まず1点目、こちらは少し重複するかと思うが、令和7年度に次期学習アプリの検討をするということだが、今の使用状況から見るとやはり使用頻度をもっと上げるべきなのではないかと思った。75%の担任が使っているということだが、4人に1人の計算となるので、これが高いか低いかは本当に微妙なラインかと思う。やはり全員が使えるような環境を作っていくことが、子どもたちの平等な教育環境に繋がるかなと思うので、この件に関して慎重な意見ということでご意見させていただきたいと思う。

二つ目として製造業の経営者という立場で少しDXについて意見させていただきたい。会社で実際DXを進めるにあたり、この分野に関して得意な人材を育成させていただいた。そのことで現状の課題を抽出してもらって、あとDXに向けた推進計画を立ててもらって、社員全体の教育を行うという一連の流れを、ここ何年かやらせていただいている。こうすることで社員全体での勉強会を行って、会社全体でのDXに対する知識を向上させることで、世代を問わず、当社の方も70歳から18歳までの幅広い世代が在籍しているので、社員全員が一定の知識を習得することが本当に重要だと考えている。そうすることでDX化が推進したという事例もあったので、こういった形でDX化を加速するといった方がすごい有効であるということで、意見させていただく。後、知識がない方はどうしても先に進まないという現状があるので、なんとなくでも使ってみる、使ってみていろんなブラッシュアップしていくことが重要なかなと私どもは考えている。あと、教職員全体で一定の知識を図ることが重要かと思う。そうすることで教職員の差が出ないことで、より良い子どもたち全員が同じような教育を受けられるので、この辺を一度検討していただけたらということで、意見させていただいた。

あともう1点、最後に、アンケートから見ても全体的にアプリの使用頻度が高い状況ではないかなと思う。実際アンケートからだ、先生の世代別でどの世代が得意なのか不得意なのかとか、こういったもう少し踏み込んだ情報が必要ではないかと思った。教育DXのさらなる推進に向けて具体的な方針を立てる上でも、もう少しエビデンスとして必要な部分があると思うので、もう少し教育現場が抱えているDXの課題とか、何を求めているかニーズ調査ですね、そういったことをしていただくことで、より良い教育現場でのDXが進むと思う。現場の意見をしっかりと汲み上げていただければより良い教育DXは進むと思い意見させていただいた。

(市長) まず1点目の先生方のアプリの使用頻度を上げていくということは、先ほどの研修と大きく関わってくるところがあるが、教育委員会と一緒に知恵を絞りながらどうやって頻度を上げていくかという部分について、取り組んでいきたいと思っている。あと2点目については、杉山委員は会社の経営者ということで、社員のDX教育をどうやっていくかということでお話をいただいた。教育委員会の話とはずれてしまうかもしれないが、私も市職員のDX教育をどうやってやっていくかということは日々考えている。考えていく中で、学校の先生も同じだと思っているが、いわゆるプロDX職員というか、プロDX先生みたいな方も必要な一方で、杉山委員の発言のとおり、平均値を上げていくっていう、両方やらなければいけないと思っている。先生方にもすごいDXが好きな先生も中にはいて、明らかに得意なんだろうなっていう先生はいることから、その方にどんどん先行して勉強いただき、知見を広めていただくみたいな、取り組みもできるのではないかと考えている。

あとは3番目の先生の世代別の利用頻度というのは、ご指摘いただいたとおりだと、世代別の利用頻度を分析すると大きく違いが出てくると思う。多分20代の方は9割ぐらいの値になってきて、逆に60代の方はだいぶ低い値が出てくるかもしれないし、マーケティングと同じだと思うが、そこに向かってどうやって年代別に対策していくべきか、何かそういったアプローチは必ず必要になってくるので、そこを考えていきたいと思う。

(企画政策課長) その他、市長、教育委員の皆様からこの案件について、何かございましたら発言をお願いしたい。

(西川委員) やっぱりDXを進めていくのは本当に大切なことだし、今後子供たちがそういったものを学習に触れるというのは、とても大切なことだと思うが、ふと考えたときに、そういったドリルであったりとか、問題を解くとか、あとはわかりやすい問題が今YouTubeを見ればとても溢れていて、そういったものは自宅での学習でもできることだと思う。それでは、学校教育としてやっていくことって、あと教員や先生方のお仕事ってどういうことなんだろうというふうに、今皆さんのお話聞きながら考えたときに、これは私個人の考えにはなるが、そういった問題を解く力であったりとかそういったものをただ教えるというよりは、それをやる気にさせるというか、生徒たちのモチベーションを上げるとか、対人コミュニケーションを上げていくとか、

そういったスキルをコミュニケーションスキルとか、そういったものを向上させる道徳心であったりとか、そういったA Iとかでも教えてもらえないことにも重きを置きつつ、そこも一緒に学校教育として先生方のスキルをさらに上げていただきたいというふうに考えている。

(市長) 西川委員の発言のとおりこれからはデジタルと言われている時代だからこそ、例えば人に敬意を払うとか、いわゆる道徳心みたいなものが重要になってきていると思うので、そこは大事にしなければいけないと、私も教育長も思うところである。

(企画政策課長) それでは次の協議事項である市内学校における自然体験活動について、先ほどと同様に、教育長より説明をいただいた後、市長に発言をいただき、その後教育委員の皆様には順番に発言をいただき、市長からは1人の委員が発言した後に意見を述べていただくという流れで進める。それでは教育長からの説明をいただきたい。

(教育長) 市内小中学校における自然体験活動について報告する。自然体験活動の意義について文部科学白書から取り出したが、自然体験活動には多くの意義があり、充実を進めることは重要である。また、グラフにあるように自然体験と自己肯定感や道徳観・正義感、人間関係能力などとの相関関係も認められている。このように子供たちの成長にとって自然体験活動はきわめて重要であり、小中学校には、その充実が求められている。湖西市は、山から海まで自然が豊富で、農業や漁業、レジャーなどに従事する方も大勢おり、学校に協力的な方も非常に多く地域を上げて協力いただいている。続いて小中学校で行われる主な体験活動をまとめたが、知波田小学校ではふるさとの日と銘打ち、校区にある干潟に入った活動や農家訪問、そして総合の学習として今川探検を行っている。東小学校では地域の方と連携した農業体験、さらに浜名湖畔でのカヤック体験を行っている。白須賀小学校では大豆の栽培から収穫、そしてみそづくり、その一年後に味噌が完成するという体験活動を継続的に行っている。ここまで3校を例に説明してきたが、湖西市内の学校には3つの強みがあり、それぞれの校区の特徴をいかして充実させてきている。冒頭説明した通り、自然体験活動は、子供たちの成長に有意義なものであることから、今後も豊かな自然環境と協力的な地域の方々の力をお借りして、充実させていきたいと考えている。

(企画政策課長) それでは議論に入るため、市長の発言をお願いします。

(市長) 子供のときに自然に多く触れるいうことで五感を刺激して、好奇心を育て心身の成長にとっても効果があると思っている。特に先ほどのA Iとかデジタルのところで関わってくるが、これから私達の仕事等が相当な分野、相当なスピード感で機械に取って代わられる時代がすぐそこまで来ていると思う。そうすると、何かインプットしたものを正しく出すという能力よりも、いろんなものを感じて、考えて、創造性を豊かにするということが、これからより大事になってくると思っている。その上でやはり自然体験は、湖西市は本当に素晴らしいところで、湖西連峰の山があり、湖も浜名湖があり、海も遠州灘がある。そういった意味で子供たちの教育にとっては最高の

場所だと思っている。事実、都会のハイソサエティーな方々は、薄々それに気づいていて、例えばインターナショナルスクールとかに行ってる子供たちは、1週間で60万円とかを使って、自然豊かなところにわざわざ行って、自然体験をして帰ってくるということをしている。片や湖西はすぐやろうと思えば、すぐできるというような環境にあるため、今でも学校現場でいろいろな体験活動をやっていただいてて本当にありがたいなと思っているが、例えば北部の方は山の体験、南部の方は海の体験みたいな形になってしまうので、海に住んでる子たちも山の体験をぜひしてほしいし、逆も然りというようなことで、さらに子どもたちの体験活動を加速させたいということで、本日の協議事項とした。

(企画政策課長) それではここから教育委員の発言をいただきたい。まず始めに西川委員に発言をお願いします。

(西川委員) 学校教育においてそういった自然体験活動を進めていくというのは、すごく賛成だが、それをやっていく中でまず自然体験活動を行うと考えられる場所と学校の距離が離れている場合っていうのもやっぱり考えられる。そういった場合、例えばバスを用意するとか、そういった市の支援っていうものが、必要になってくるかと思う。それをきちんと予算であったりとか、そういった部分もしっかりと手当を考えていただき、市の支援をして活動がさらに広がっていくようにっていうものを1点お願いしたいと思う。

(市長) 今の発言が1個の課題であって、やはり実現するときには、例えばバス代の予算措置とかそういったものが必要になってくると思うので、そこは1年かけてしっかりと精査をして、教育長と相談して次の予算に組み込みたいと思う。

(企画政策課長) 続いて山下委員に発言をお願いします。

(山下委員) 私からは2点。職場体験の現状ということで、私達の子どもの頃の学校では、生き物を飼育していて当番などがあった。けれども、市内で飼育している生き物の現状をお伺いしたところ、白須賀小学校では4年生が鯉を学校での飼育をされてるってということで、あと東小学校ではうさぎを飼育されている、あと他の中学校で何かいろいろあるということで、学校で飼育している生き物っていうのは、そんな感じだった。市内では生き物に関わる職業が多くある。それらの職場体験がされてるかっていうことで確認したところ、中学校によっていろいろあることは確認できたが、もう少し生き物に関わるっていう職場体験をしたらどうかなって思う。

それともう1点、具体的な提案をしたい。自然体験活動、学校によっていろいろあるが、それを食育に繋げるために、調理実習をするのはどうかっていうことである。現状家庭科でやっていると思うが、それを学校の先生だけではなくて、地域の方を講師に招いて指導していただくっていうのはどうかな、そのシーンが必要じゃないかなということで、農家さんもできる方は知っているので、そういう方を紹介することは私はできる。学校に講師を招いて調理実習、それが例えば米を作ってその後どうするのか、また飯ごう炊飯もやるかと思うが、それだけではなくて取れたものをいかに

調理して口に入れるかっていうところまで、流れてやっていただきたいなと思う。調理実習に校外の方を講師に招いて指導していただくのはどうか。

(市長) 現状、調理実習において外部の先生が講師に来ることはあるのか。

(教育長) 詳細はわからないが、かつて漁師の方や漁協の方に来ていただき、調理実習を手伝っていただくとか、今も保護者等にミシンのボランティアとか、いろいろな学校応援団のボランティアを各学校が募っているの、その流れの中で調理実習でも手伝っていただいている例はあるかもしれない。

(市長) 私も現場がどうなっているのかを把握しきれていないため、まず現場を確認して、可能なのかというのはまた研究していきたいと思う。あと、1番目の意見については、生き物が関わる職業というと、漁業と養豚業であると思うが、まず養豚の方は豚熱のことがあるので、外から人が入るっていうことに対して、ものすごい気を遣っているの、現実的に無理だと思う。ただ、漁業のところは、私もぜひ子供たちに体験してもらいたいと思っており、例えば、牡蠣の養殖の牡蠣棚のところに行って、吊り下げて牡蠣を育てて、また時期が変わったら動かしてというのを見るのは、教科書を読むのとは全然違うし、あと私の地元の鷺津とか入出だと、角立ての漁も今は少なくなって来ましたが、迷路みたいな網を仕掛け、先が袋みたいになっていることから、そこを上げるともうカニや魚、いろいろなものが入っていると、そういう角立漁というものを昔からやってるいるが、そういったものを子供たちに見てもらい体験してもらえば、いろいろな価値観も変わってきたり、いろいろな刺激もあるかなということで、ハードルはいろいろありそうだが、私としてもチャレンジしていきたいと思っている。

(企画政策課長) 続いて穴水委員に発言をお願いします。

(穴水委員) 先ほど市長も山の子にも海の体験をとおっしゃっていて、私も同じ意見でして、東小学校ではカヤック体験をやっており、私3人子供がいるが全員体験させてもらって非常に楽しかったってみんな言う。ぜひ他の学校の方にも体験をしていただけたらと思う。水の周りでやるので非常に先生方にとっては気を遣う大変だと思うが、安全に留意しながら、せっかく浜名湖のそばにいますので、たくさんの方に体験をしていただけたらと思う。

もう一点、遊具について。私どもが子供の頃にはいろんな学校だけでなく公園にもたくさん遊具があった。今思うとあれは危ないものだったのかなっていうような物までたくさんあり、児童の保護者が力を合わせて学校に遊具を作るなんていうのも、あの頃はいろいろな学校であったんだと思う。私の母校の東小学校にもあった。高さが高すぎて、私は少し嬉しくなかったが、そういうものがだんだんと老朽化してきたり、また老朽化じゃなくても事故があって子供が怪我したりすると、全国的にそういうのが報道されて、そうすると少し危ないってなるとすぐに撤去されてしまうような流れが今までずっと続いてきていると思う。みるみるうちに遊具が減ってしまっており、小学校においても、だいぶ減ったなあというふうに感じている。ただ楽しみなが

ら自然に身体能力が向上するってそういう面もあるので、あんまり危険な物はあれだが、できればもう少し遊具を増やして自然と身体能力が向上するようなことになると、市長のおっしゃる自然体験もさらにやれることが広がってできるんじゃないかなと思う。お金の問題もあると思うが、ぜひたくさん遊具で子供たちを楽しませてあげていただけたらと思っている。

(市長) 遊具に関しては私も同意見で、小さいお子さんをお持ちのお母さん方からも必ず言われることであるので、遊具の種類を増やしていったり、充実させていったり、例えばよく聞かれる湖西の運動公園の遊具は、少し大きい子向けというか、息子と娘が小さいころよく連れていったが、小学校低学年でもきついような遊具しかなかったりするので、小さい子向けの遊具を揃えたりとか、種類もそうですけど年齢の幅も持たせるような遊具の整備っていうのは、私も職員と一緒に考えてるところである。

(企画政策課長) 続いて杉山委員に発言をお願いします。

(杉山委員) 私の方から2点ご意見させていただきたい。自然体験活動、市長のおっしゃられることに関しましては私も非常に賛成で、湖西には小学校によって人数が多い小学校とか少ない小学校があったり、バランスが悪い部分がある。人数が多い学校では授業の一環としてやるには費用的なコストがどうしてもかかってしまうかなっていう部分があるので、そういった意味でも湖西連峰とか浜名湖とか海湖館とか大倉戸の観光農園とか、いろんな自然体験できる場所を遠足に使ってみたらどうかなっていうことを提案させていただこうかなと思っている。どうしてもバスで思い出作りとしていろいろなところに行くので、その6年間の中の1回としてそういう体験、湖西市にはこういったところがあるということも思い出作りになると思う。うまく抱き合わせでコストを抑えながら、子供たちに自然体験をさせてあげるっていうのも非常に面白いなっていうことでこの件に関しまして提案させていただきたい。あとは湖西市の多くの小学校は観音山に行くっていうのを聞いておりまして、多分小学生で湖西連峰に登る機会はないかなと思う。いきなり観音山に行って子供たちも大変なので、ぜひとも湖西連峰を予行演習じゃないですけど、1回登って自然を体験するってのは非常に有意義な体験だと思う。そういう機会を子供たちに与えてあげたらより良い自然活動ができると思い、これを提案ということにさせていただきたい。

二つ目に関しては、自然体験活動も非常に重要と思うが、やはり湖西市はもの作りのまちであるので、もの作りの体験活動も必要だと私は考えている。令和6年湖西市ポケットデータバンクを見たが、こちらの職業人口、第2次産業が湖西市は48.1%ということで、全国平均が23%に対して倍の人数が第2次産業、製造業に勤められているということで、やっぱりもの作りのまちだなんてデータのエビデンスも出ている。そういった意味でも義務教育期間中に子供たちにももの作り体験っていうのをさせてあげたいなと私は思っている。やっぱり幼少期から物事に触れることで、いろんな見るだけじゃなくても体験することで子供たちが興味を持っていくことが、この先湖西市の発展にも繋がっていくかと私は思っている。もの作りの体験をさしてあげたい。実

際、中小企業としては人手不足で困っているのも、長期的な目で見て湖西市で育った人が湖西市で働いていただくというのが理想的な形かなと思う。そういった意味でも幼少期からもの作りに触れる機会も大事だと私は思う。あと、湖西市の良い点として、各小学校の近くに工場があるので、バス移動とかせずに歩いていける。そういった湖西市の特徴も生かしながらだと、もの作り体験もできるかっていうところで、コストも当然抑えながら、企業の協力さえもらえればということで非常にいい体験できるので、ご一考していただければと思う。

(市長) 一点目の湖西連峰については、私もぜひ湖西市内の子供たちには登ってもらいたいと思っており、湖西連峰に登ったことがあるか空手の教え子10人ぐらいに聞いたところ、ほぼなかったっていうこともあったので、そこは地元のいいところを知るという意味でも、登ってもらいたいと思っている。2点目のもの作りですが、市でもモノづくり推進室という若手職員が中心となり、先日もイベントをやっている。杉山委員はもの作り会社の社長であることから、こういう体験はどうかということで、また教えていただけるとありがたい。あと発明クラブはここ数年で人数が相当増えていて、中学部もできてとても活発な活動をしているので、市としても引き続き応援していきたいと思っている。

(企画政策課長) その他、市長、教育委員の皆様からこの案件について、何かございましたら発言をお願いしたい。

(教育長) 海の子に山の体験を、山の子に海の体験をというのは非常に納得できる、素晴らしい考えだと思った。途中で少し話題になったが、バス移動の際のコスト面以外にもう一つ課題を挙げるとすると、時間を生み出すということが、課題になると思うし、それぞれ自然体験活動、各校で工夫してやっているものとの絡みもある。その時間をどうやって生み出していくのかということ踏まえ、どのような形でそれが実現に向かうのかを、相談していかなければならないということを改めて感じた。

(山下委員) 杉山委員から湖西連峰の話がでたと思うが、私の子供たちは白須賀幼稚園の遠足で、湖西連峰の梅田口から登って第2鉄塔まで年長さんは登った。その時保護者として私も参加した。学校とは少し違うが、幼稚園でされてるところが、他にもあったのかなって思う。

(企画政策課長) 以上で、この項目に対する意見交換を終了させていただきます。最後にまとめとして市長に発言をいただきたい。

(市長) 本日はたくさんの気づきをいただくことができて感謝する。課題は、自然体験にしても、DXにしても、何か新しいことをやろうとすると、壁が出てくることから、何とか知恵を絞ってクリアしていきたいと思っている。

(企画政策課長) 以上で、令和6年度湖西市総合教育会議を閉会する。